

共同研究成果報告書

提出日：2025 年 10 月 7 日

名城大学 学長 殿

受入引受教員 (共同研究者)	所属・職名	外国語学部・教授
	氏 名	豊田 周子 ㊦
研究員氏名	王 惠珍 (国籍：中華民国・台湾)	
共同研究期間	2025 年 6 月 10 日～2025 年 9 月 9 日 (三ヶ月)	

共同研究要旨	本共同研究は、戦後東アジアの「日本語語系文学」の研究で近年顕著な業績をあげる、台湾国立清華大学台湾文学研究所の王惠珍教授を招聘し、これまで国境を越えて統合的な観点から分析されることがほとんどなかった、戦後日台の知の交流について、次の二点から探究することを目的としたものである。 (1)戦後、とくに 1972 年の日台断交前後の文化交流に着目することで、旧宗主国である日本の言論市場を突破口として、国民党政権による言論統制下にあった台湾の知識人たちが、台湾文学の命脈を保つべく如何に奮闘したか。 (2)日本の植民地統治から脱した台湾人や戦後台湾から引き揚げた日本人が日本統治期の記憶を如何に描写し、戦後台湾のイメージ形成に影響を与えたか。
共同研究成果	以上の目的のもと、王教授は台湾の民主化運動に深く関わった台湾文化人の作品やその公表の場に関する状況の分析を、豊田は台湾の日本語作家や歌人が、戦後日本の知識人と関わるなかで公表した作品の分析を行った。王教授の研究成果については次頁の報告書に譲る。王教授から示唆をうけた豊田の研究成果は以下の通りである。 「呉濁流『無花果』日本刊行の意義」『呉濁流全集』(文訊出版社、近刊) 書評「垂水千恵著『台湾文学というポリフォニー ——往還する日台の想像力』」(『立命館言語文化研究』37 巻第 2 号、近刊) また、所属学部にて開催した王教授の講演を通じて、我が国においては公にされることの少ない日本と東アジアの現代史を学生が知ることとなり、学部ディプロマポリシーに合致した教育上の効果を挙げた点も特記したい。 以上の活動を通じて、戦後台湾の日本語文学の存在意義を確認すると同時に、それらによって東アジアの新たな心性史が拓かれる可能性に気づかされるなど、今後の共同研究を進展させるうえで重要な視点が得られた。 このような機会を与えてくださった本学国際化推進センター、外国語学部、そして関係者の方々に篤くお礼申し上げたい。

(国際化推進センター処理欄)

(提出先：名城大学国際化推進センター)

共同研究終了報告書

提出日：2025 年 9 月 10 日

名城大学 学長 殿

研究員氏名	王 恵珍	(署名)
研究期間	2025 年 6 月 10 日～2025 年 9 月 9 日 (三ヶ月間)	
受入引受教員 (共同研究者)	所属・職名	外国語学部・教授
	氏 名	豊田 周子

研究課題名	戦後日台文学のノードに関する多角的研究
研究結果	本報告は、2025 年 6 月 10 日から 9 月 9 日までの三か月間、名城大学外国語学部において実施した短期訪問研究の成果をまとめたものである。本訪問は、豊田周子教授ならびに名城大学外国語学部の招請により実現したものであり、ここに深甚なる謝意を表する。訪問期間中の活動は、「学術活動」「教育活動」「研究資料の収集」の三項目に大別される。以下、それぞれについて順に報告する。 1.学術活動 滞在期間中、以下の二つの学術発表を行った。 (1)「冷戦期呉濁流文学の米国流通と受容における文化政治の考察」(天理台湾学会学術研究会) (2)「戦後台湾日本語文学——呉濁流文学を例として」(名城大学) これらの発表を通じ、近年ポストコロニアル研究において注目を集める「華語語系」研究と比較しながら、東アジアの日本語語系研究が提示し得る新たな論述的枠組や検討課題について、改めて検討する契機を得た。 また、関西地域で開催された「中国文芸研究」夏季合宿にも参加し、特別企画「中国系米国文学特集」の関連発表を聴講した。近年の学術研究は、国際化・学際化・多言語化が急速に進行しており、この機会を通じて日本の中国文学研究者による領域拡張の動向を直接把握することができた。 2.教育活動 豊田教授の担当授業「中国地域研究」において、「戦後台湾日本語文学——呉濁流文学を例として」と題する講演を行った。日本の大学における講演経験は限られており、戦後台湾日本語文学という日本の学生にとって馴染みの薄いテーマを、平易かつ的確な日本語で紹介することは大きな挑戦であったが、豊田教授のご助力のもと、円滑に遂行することができた。

(提出先：名城大学国際化推進センター)

特に、本年が日本の戦後 80 年にあたる節目であることから、学生たちが報告中に取り上げた台籍日本兵・磯村生得の戦争記憶表象に強い関心を示したことは印象深かった。

3.研究資料の収集

滞在期間中、東京の国立国会図書館にて戦後台湾文学および翻訳関連の一次資料を調査するとともに、書店にて最新の学術出版物を購入した。さらに、下村作次郎氏、岡崎郁子氏、黄英哲氏など、在日研究者数名を訪問し、日本における台湾文学の紹介・翻訳・出版に関する経験を直接伺った。これらの知見は、今後の日台間の文化・学術交流のさらなる推進に向けた基礎資料となるものである。

本訪問研究において、学術的知見の深化、教育経験の拡充、そして貴重な一次資料および口述史の収集という三つの面において、極めて充実した成果を得ることができた。

センター長	国際化推進センター	担当者

(国際化推進センター処理欄)

国際化推進センター受付

令和 年 月 日